物理学 ▶ 報道

科学記者

報道の現場から見た科学界

藤木信穂（日刊工業新聞社科学技術部　記者）

仕事の内容と醍醐味

科学記者の使命は、人類共通の“知”である科学技術の成果をすばやくかつ分かりやすく、正確に報道することです。新しい知が生まれた現場に向かい、研究者や技術者の話を聞き、新聞記事に仕立てて社会へ発信する――この一連の取材の過程は驚きと感動の連続です。ダイナミックに動く知の現場は刺激的であり、仕事は生きた学びの場です。次代へ継承する知をつむぐプロセスの一端を担っているとの意識が、働く原動力につながります。「今、科学技術の何を伝えるべきか」と日々、自問自答しながら仕事をしています。

進路決定のきっかけ

大学でははじめ数学を志していました。しかし、数式を使って自然を鮮やかに記述する学問の美しさに惹かれて、入学後に物理学専攻に進みます。その後も、生命科学や脳科学、宇宙、医療、環境分野などに興味が広がってしまい、肝心の物理学の成績は散々でした。研究者になるのは絶望的だったので、科学全般を扱える仕事に就こうと考えるようになりました。無機的な科学ではなく、研究の現場で起こるドラマや、研究者の素顔をのぞいてみたいという気持ちで、科学ジャーナリズムの世界に足を踏み入れました。

仕事と生活とのバランス

記者の勤務時間はあってないようなもので、仕事場を離れても常にアンテナを張り巡らせておくことが必要です。その点では研究者と似ていますね。ですから、生活とのバランスがきっちりと取れているとは言えないかもしれません。しかし、多くの人と出会い、見聞を広めることは人生の喜びであり、生きる糧となります。仕事を通じて自分の世界を広げられる今の状況は大変幸せだと思っています。常に取材テーマを持って、仕事を生活の一部として楽しみながら、ライフワークとして取り組みたいと考えています。

進路選択に対してのメッセージ

いわゆる「文系」出身者が社会のリーダーの大半を担う日本では、「理系」のキャリアパスの幅が狭いと言わざるを得ません。これは世界と大きく異なる点です。特に博士号取得者の活躍の場を広げ、科学技術創造立国ニッポンを活性化する人材に育てる必要があります。自分の興味ある分野を究めるとともに、世の中との接点を常に意識し、社会を変革するリーダーをぜひ目指してください。現代社会で科学の知識は教養の一つです。「理系」であることに縛られず、柔軟な発想で職業観を養って欲しいですね。

＜藤木信穂（ふじきしほ）プロフィール＞
1999年　千葉県立千葉東高校卒
2003年　日本女子大学理学部卒、自然科学系学術出版社
2004年　日刊工業新聞社